

中学受験期に起きるエデュケーショナル・マルトリートメント

— 学習塾が果たせる役割の検討 —

Educational Maltreatment that Occurs during the Junior High School Entrance Exam Period:
— Considering the Role that *Juku* Can Play —

浅見 里咲*

Risa ASAMI

要 約 エデュケーショナル・マルトリートメント (Educational Maltreatment : EM) とは、臨床心理士武田信子が作った、教育の名のもとに行われる子どもの人権を著しく傷つける行為の総称かつ、いわゆる「教育虐待」や「不登校」などの子どもの教育全般における諸問題を、社会の価値観が生む現象として捉えるための概念である。本研究は、これまで「家庭の問題」として語られてきた「中学受験期に起きる教育虐待」について EM 概念を用いて検討した。この時、中学受験に欠かすことのできない学習塾の存在に着目し、父親・母親・学習塾それぞれの中学受験期の関わりが、中学受験経験者にとってどのような影響をもたらすかを回顧調査から探った。分析結果より、学習塾の関わりが持つ影響力の高さが示された。

キーワード : 中学受験、学習塾、教育虐待、エデュケーショナル・マルトリートメント

Abstract Educational maltreatment (EM) is a term coined by clinical psychologist Nobuko Takeda as a general term for acts that severely infringe upon a child's human rights in the name of education. EM is a concept to understand problems in children's education in general, such as “educational abuse” and “refusal to attend school,” as phenomena that arise from social values. “Maltreatment of a child during the junior high school entrance exam period” had previously been discussed as a “family problem,” but the current study used the concept of EM to examine that maltreatment. The current study focuses on the existence of *juku* - a cram school, private tutoring classes, or private lessons outside of school - which are indispensable for junior high school entrance exams, and it conducted a retrospective survey to examine how a father, mother, or *juku*'s involvement in the junior high school entrance exam period affected children taking that exam. Results indicated the strong influence of a *juku*'s involvement.

Key words : Junior high school entrance exam, Shadow education, Educational maltreatment, Maltreatment of children

I. 背景と目的

中学受験とは、指定学区内の公立中学校以外の私立・国公立中学校へ進学するための入学試験と、そ

の準備過程のことである。首都圏1都3県の中学受験率は、2024年現在、10年連続で上昇が続いている^{1,2)}。しかしその渦中では、早くて幼児期から12歳にかけての子どもたちに対する「教育虐待」が起きるケースがあることが、度々ジャーナリズムによって明らかにされてきた。本稿ではこの中学受験期に起きる「教育虐待」を、エデュケーショナル・

* 家政学研究科児童学専攻
Graduate School of Home Economics, Child Studies

マルトリートメント (Educational Maltreatment : EM) として広義に捉え、「親の心がけ次第」で回避できる問題ではないという立場から論じる。なお EM とは、子どもの人権を著しく傷つける行為の総称³⁾であり、さらに「教育虐待」や「不登校」などの子どもの教育全般における諸問題を、社会の価値観が生む現象としてとらえるための概念でもある⁴⁾。

「中学受験期に起きる EM」の問題点は、これが「家庭の問題」にとどめられやすく、社会的な問題として扱われにくい点にあると考える。これは、中学受験が子どもの進路にとって「絶対に必要な選択」とは言い切れないことや、都市部の比較的富裕層に限定された問題であることに起因するのではないかと。つまり中学受験はその家庭が自ら望んで選ぶイベントであるがゆえに、「嫌なら選ばなければ良い」「(受ければ) 結果オーライ」「所詮は贅沢な悩み」「親のエゴ」などと、安易に「自己責任」の範疇に押し込められ、それに伴う様々な問題が「中学受験ってそういうものだよ」と通俗的に正当化されてしまうのである。

我が子に中学受験をさせる保護者においても、この問題に対する認識は薄いようである。それは2012年、ベネッセ教育開発センターによって当時小学3年生～6年生の子どもを持つ父親・母親5256名を対象に行われた調査『首都圏の保護者の中学受験(受検)に関する意識と行動』⁵⁾から垣間見ることができる。この調査では、質問21「中学受験をやめさせようと思ったのはなぜですか」、質問23「中学受験をさせるかどうか、まだ決めていないのはなぜですか」、質問24「中学受験をさせないのはなぜですか」について、それぞれいくつかの具体的な理由が並べられ、その理由に対し「とてもそう」から「全くそうでない」までの4件法で問われた。回答数は質問21(やめさせた理由)が920件、質問23(決まらない理由)が1316件、質問24(しない理由)が3020件であった。具体的な理由のうち「親子関係が悪化する／しうだから(怒ることが多くなるなど)」に対し「とてもそう」「まあそう」と回答した割合は、質問21は60.4%、質問23は31.6%、質問24は34.5%であった。質問21・23・24間で共通する具体的な理由が14項目ある中で、中学受験の決断前と決断後の割合に大きな差が見られたのはこの理由のみであった。またこの割合は、質問23・24内で他の理由に当てはまると回答した人

の割合と比較しても、特に低かった。

約10年前の調査であるため、現在は違う結果が示される可能性も否定できない。しかしこの結果から、多くの保護者にとって「中学受験による親子関係の悪化」はあまり問題視されず、仮にこのような事態が起きたとしても「想定外の出来事」として映る可能性が高いことが想定される。あるいは事前にその心づもりがあったとしても、「うちは大丈夫」「親の心がけ次第で回避できる」と捉えられているならば、やはり心情的に切り捨てられ、自分が当事者であると認めるには時間を要するであろう。

調査では他にも、中学受験を想定した学力向上のための準備が早期から行われることが明らかにされた。我が子の教育への投資が早く始まるほど、また投資額が大きいほど、それをもったいないと感じ、「中学受験が終わるまでのことだから」と、家庭内の EM 状態を作り続けてしまう家庭も存在するかもしれない。

たとえ家庭内で EM が起きてしまっても、子ども自身から家庭内外の大人に対する強い訴えがあれば、それを止めることが可能であるとも考えられよう。しかしそれは、保護者の庇護下にある小学生にとって勇気の要る行為である。もっとも、その子にとって家庭内での出来事は「普通」のことであり、それを「EM である」とは認識していないと考える方が自然である。そのため家庭の中だけではどうにも抱え切れないほどの心身の不調が我が子に現れた時、初めて保護者は、その問題を認めざるを得ない状況に直面するのかもしれない。

こうした事態を未然に防ぎ、子どもたちを守ることができるのは、その内情をよく知り、親子それぞれとの接点を持つことができる教育産業なのではないか。ただしそれ自身は「保護者に子どもを教育させることで報酬を得る」構造にあって「教育させない選択を提示すれば、報酬を得られなくなる」というジレンマを抱えている。顧客家庭の状況がどうであろうと、継続できる家庭にのみサービスを提供すればビジネスが成立するため、「継続できないなら辞めれば良い」と切り捨てることができる。むしろ少子化によって顧客獲得が難しいために、「今ここで諦めて本当に良いのか？」などと、家庭の苦境に拍車をかけているかもしれない。いずれにしても顧客である保護者は「子ども自身とその未来」を教育業界に託している以上、教育産業の示す方針に従うほ

かないであろう。その結果、「中学受験とはそういうもの」と認識せざるを得ない状況が作られていることも想定できる。

しかし、中学受験やその指導塾という限られた領域で教育産業を否定的に捉えるのではなく、広く学習塾を見てみると、子どもたちを守ろうとする働きかけが全く起きていないわけではない。近年、学習塾が「居場所」の提供者としての役割を果たすことが明らかになり、その社会的価値が示唆されている⁶⁾。また学習塾には相談支援によって生徒と保護者の心を支える働きがあり、学習塾で働く者もこれを重視していることが明らかになっている⁷⁾。

佐藤（2010）は自身の学習塾でのアルバイト経験から、塾が生徒にとって「学習の場」としてのみならず「憩いの場」としても機能していることに着目した。大手塾から個人塾まで、指導形態や指導目的の異なる5つの学習塾の協力を得て、中学生を中心とした通塾生約400名と、その保護者約100名を対象に、アンケート調査と、一部学習塾経営者も対象としたインタビュー調査を行った。得られた事例から、塾の持つ顕在機能：「学力補完機能」「学力向上意欲補完機能」「受験対応機能」と、潜在機能：「社会的居場所機能」「自己居場所機能」「家庭教育代替機能」「（家庭の憩い機能の代替としての）人間的居場所機能」が明らかになった。これらは塾の形態によって向き不向きがあるものの⁸⁾、生徒の求めに応じて働いていることがわかった。保護者についても、顕在機能が働いていることを前提とするものの、塾の潜在機能に対する期待や、それによる満足感を抱いていることが明らかになった。またいじめや不登校傾向などの学校で起きた問題に対し、学習塾が学校からの依頼を受けて介入し、解決に向かわせる事例も存在した。以上のことから佐藤は、学習塾が「家庭・学校・地域の受け皿」になり得ると結論づけている。また「居場所」提供活動を行う団体の多くが経済的基盤の問題等で安定しない状況に比べ、学習塾は子どもたちに安定した「居場所」を提供し続けることが可能であることにも触れ、ここに新たな子育て支援の形を見出している。

今井ら（2020）による研究も、今井が塾職員であることに端を発し「これまで受験戦争を助長し生徒のストレス要因にもなり得るという側面を持ちながらも、塾は現在も学校外教育の主要形態として存在している」⁵⁾ 要因の一つとして、塾職員による相

談支援行為に着目した。そして量的研究より、これを塾職員がどの程度重視し、どのように機能しているかを明らかにした上で、塾職員が満足や疲弊を感じる場面をモデル化した。調査対象となった塾職員が勤める学習塾の形態は、指導目的別に進学塾⁹⁾ 212名、総合塾¹⁰⁾ 228名であった。このうち81.1%は、相談支援を学習指導と同等かそれ以上に重要であると答えた。また相談支援は「生徒への寄添助言機能」「親子関係調整機能」「保護者受容機能」の3つに分けられ、特に「保護者受容機能」はここで初めて明らかになった。また塾職員の満足・疲弊場面と相談支援との関係から、職員が保護者を「大切な生徒の養育者」とみなし、営利目的に関わらず、生徒貢献として保護者支援を行っていることが推察されたという。

2つの研究から、学習塾が学業を補う機関として存在するだけではなく、学校で対処しきれない日常生活の側面をも補う機関として存在することがわかった。また保護者も学習塾の働きによって我が子の態度が変わることを期待し、相談の場として頼りにしていることから、学習塾は家庭のしつけを補う機関としても存在することがわかった。これらを踏まえて、学習塾を子どもの視点から見てみると、次のことが考えられる。学習塾は、成績という「本来なら隠しておきたい事情」が知られることを前提に始まる関係であるが故に、他の抱えきれなくなった「隠したかったこと」についてもさらけ出しやすい場であるのかもしれない。そもそも学習塾に通うという行為が、子ども同士の間で「親に言われたから」などと言いつつ行為であることも重要であろう。つまり子どもたちにとって学習塾は、家族に対してはもちろん、学校の仲間に対しても一定の体面を保ちながら、自分の本音をさらけ出すことのできる「都合の良い逃げ場」なのである。さらにここで、学業や、講師という「ナナメの関係」¹¹⁾との出会いを通じて新たな発見があり、それによって「自己イメージ」を取り戻したり、新たに形成したりする機会を得ているのではないのか。

中学受験を取り巻く現状は、あらゆる面で子どもを守る動きの起こりづらさを招いている。しかしこうした側面に目を向ければ、学習塾は学校と家庭という学童期以降の子どもの生活全般に関わり、あらゆる問題に対処し得る機関であると言える。そのため子どもたちの成長の伴走者としての学習塾が、こ

の状況を変えることができるのではないかと考えた。そこで本研究は、「中学受験期に起きる EM」の実態と中学受験期における家庭と学習塾の関わりが子どもにもたらす影響を明らかにすることを第1の目的とし、この問題に対する理解を深め、学習塾による予防の示唆を得ることを第2の目的とする。

II. 方法

1. 先行研究

調査は、藤後ら(2015)によるスポーツ・ハラスメント容認志向に関する研究を参考に実施した。同研究の目的は「スポーツを通じた自身の経験が、スポーツ・ハラスメント容認志向と関連する」⁹⁾という仮説をたて検証することで、その防止のための示唆を得ることであった。この時、それまで実態があまり明らかにされていなかったネガティブな体験にも焦点が当てられた。なお同研究においてハラスメントとは「精神的苦痛や肉体的苦痛を相手に与えることであり、体罰やいじめなどが含まれる。」と定義された。

同研究を参考にした理由は、スポーツ・ハラスメントと「中学受験期に起きる EM」に多くの共通点を見出したためである。どちらも学生が絶対に取り組まなければならないことかと言えば、必ずしもそうではなく、「嫌なら辞めれば良い」ことである。にもかかわらず、何らかの要因で「辞めることができない」と思ってしまう場合がある。また大人と子どもの、教える－教えられる関係や、周囲の「そういうもの」という容認に支えられる構造も類似した。そこで「中学受験期に起きる EM」を支える「中学受験(勉強)ってそういうもの」という容認を「EM 容認志向」と名付け「中学受験期を通じた自身の経験が、EM 容認志向と関連する」という仮説を立てた。

2. 調査手続き

- (1) 対象者：東京都在住の30代までの成人
- (2) 調査時期：2023年8月
- (3) 調査方法：Web上の公募によるアンケート調査
- (4) 質問紙の構成：
 - ①属性に関する質問：性別、年齢、職業、中学受験経験の有無、中学受験経験者の志望順位別可否・進学の結果
 - ②中学受験当時の父・母・塾や家庭教師などの関

わり方に関する質問：中学受験経験者のみを対象に、当時の父・母・塾や家庭教師それぞれの関わり方の具体例、各10項目について「1全く当てはまらない」から「5よく当てはまる」までの5件法で尋ねた。具体例は子どもに対する勉強の管理方法の傾向や、懲罰の有無、心のケアの方法や身体的・心理的暴力の有無等を問う内容とした。質問内容は10年以上の中学受験指導経験を持ち、保護者との面談にも携わる学習塾職員数名への事前インタビューから独自に定めた。

③EM 容認志向に関する質問：藤後ら(2015)による先行研究で用いられた7項目の質問のうち、「切り捨て」要因であったチームに関連する項目を除き、「容認」要因であった5項目を学習場面に置き換え作成した。その際、一般的な学習場面に関する質問を3項目、中学受験のための学習場面に関する質問を2項目挙げ「1全く当てはまらない」から「6よく当てはまる」までの6件法で尋ねた。

④中学受験経験に対する満足度／願望度に関する質問：中学受験経験者にはそれを経験して良かったと思うか、非受験者にはそれを経験したかったと思うかを、「1全く当てはまらない」から「6よく当てはまる」までの6件法で尋ねた。

(5) 倫理的配慮：調査の依頼文には、研究の趣旨の説明や、個人が特定されないこと、結果は全て統計的処理を行なった上で扱われること、情報管理に十分配慮すること、回答は自由意思であり途中離脱も可能であること等を明記した。

3. 集計結果

(1) 属性

アンケート回答総数は556件であった。回答内容や所要時間から内13件を無効とし、543件(男性244名、女性299名)をグループ化し分析に用いた。グループ化の全体図は Fig.1 に示すとおりである。中学受験経験の有無を問う項目で「1有り」と答えた133件を受験群(男性64名、女性69名)、「2無し」と答えた410件を非受験群(男性180名、女性230名)とした。受験群では性別の他、第一志望校への可否結果と、満足度によってさらにグループ化した。可否結果別では合格群81名、不合格群52名

であった。満足度別では質問「中学受験を経験して良かったと思う。」に対して「4 どちらかという」と当てはまる」から「6 よく当てはまる」と答えた 99 名を満足群、「1 全く当てはまらない」から「3 どちらかという」と当てはまらない」と答えた 34 名を不満足群とした。

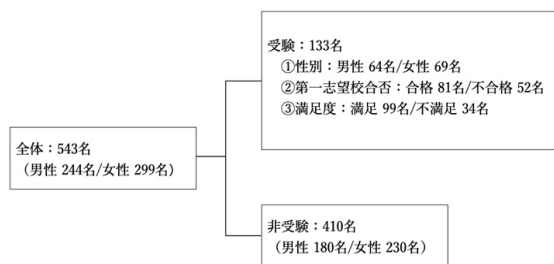


Fig. 1 Grouping of respondents

(2) 中学受験当時の被暴力・暴言経験者の割合

家庭内での身体的・心理的暴力の有無について、参考資料 1 に示した質問項目の内、⑧⑥に対し「4 やや当てはまる」「5 よく当てはまる」と答えた割合を合計すると、⑧身体的暴力は父親 13.6%、母親 12.8%、⑥心理的暴力は父親 10.5%、母親 14.3%であった。塾や家庭教師からの（身体的）心理的暴力の有無について、参考資料 2 に示した質問項目⑤⑥⑧に対し「4 やや当てはまる」「5 よく当てはまる」と答えた割合を合計すると、⑤ 26.3%、⑥ 15.8%、⑧ 10.5%であった。なお⑤⑥では、「3 どちらでもない」にそれぞれ 42.1%、39.1%と回答が集中したが、これは、特に業界大手の集団指導型の中学受験指導塾では、講師と生徒が授業以外で直接交流する機会が少ない仕組みで運営されている場合が多いためではないかと予想する。しかしどの項目も講師として望ましい振る舞いであるとは言えず、特に項目⑤は比較的高頻度で起きていたことがわかった。

(3) EM 容認志向の平均値と標準偏差

EM 容認志向に関する質問全 5 項目について、「1 全く当てはまらない」を 1 点、「6 よく当てはまる」を 6 点として、受験群、非受験群、全体の平均値と標準偏差を算出した。そのうち一般的な学習場面における質問 2 項目、中学受験のための学習場面における質問 2 項目の結果を Table 1 に示す。

先行研究のスポーツ・ハラスメント容認志向と比

Table 1 Mean and SD for scores for an EM acceptance-oriented mindset

		受験	非受験	全体
① 勉強に対するやる気を起こさせるために、少々のごき必要だと思う。	M (SD)	3.26 (1.24)	3.14 (1.13)	3.17 (.05)
② 成績が伸びないのは、本人の努力不足だと思う。	M (SD)	3.69 (1.05)	3.58 (1.15)	3.61 (.05)
④ 自分が中学受験をするに決めた以上、厳しい指導も覚悟の上だと思う。	M (SD)	3.57 (1.13)	3.70 (1.16)	3.67 (.05)
⑤ 自分が中学受験をするに決めた以上、たとえ親や塾から嫌なことを言われても、最後まで続けるべきだと思う。	M (SD)	3.27 (1.23)	3.30 (1.12)	3.29 (.05)

較すると、EM 容認志向は全体的に弱い印象を受けた。しかし先行研究では「しごきは必要」が「努力不足」よりも高い値が示され、EM 容認志向においてはその逆の結果が見られた。

次に、一般的な学習場面における質問①と、中学受験のための学習場面における質問④を比較すると、後者の値が高く示された。さらに後者は、非受験群でより高い値が示された。

Ⅲ. 分析結果

1. 「中学受験期の体験」の分析

(1) 当時の父親、母親の関わり方

当時の父親の関わりについての質問全 10 項目の、主因子法・プロマックス回転による因子分析の結果を Table 2 に示す。因子間で相関する 2 項目を削除対象とし、固有値の減衰状況より 2 因子構造と判断した。回転前の 2 因子で全分散を説明する割合は 64.7%であった。第 1 因子は 5 項目で構成され、身体的・心理的虐待に該当すると考えられる行為に高い負荷量が示された。このことから、その他の虐待的ではないように解釈できる項目についても、成果を上げる目的で我が子の闘志を焚き付けようとする行為の一部と捉えられた。第 2 因子は 3 項目で構成され、厳密な管理について高い負荷量が示されたものの、塾や家庭教師との関係が良好であることから、強制的に机に縛り付けるようなそれとは違う、子どもの学習環境を整えようとする協力的な関わりである可能性が考えられた。

当時の母親の関わりについての質問全 10 項目も同様に、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行なった。結果は Table 3 の通りである。因子間で相関する 1 項目を削除対象とし、固有値の減衰状況より 2 因子構造と判断した。回転前の 2 因子で

全分散を説明する割合は 60.5%であった。第 1 因子は 6 項目で構成され、第 2 因子は 3 項目で構成された。それぞれ父親の関わり方の因子分析から得られた解釈と同様の傾向が見られた。

以上のことから、中学受験は学童期の子どもが取り組む受験である性質上、保護者の介入が不可欠である状況が伺えた。しかしその介入方法に違いがあると解釈でき、いずれも第 1 因子を本人への直接的な指示や命令によって動機づける、成果重視の「直接介入型」、第 2 因子を学習環境の整備や応援・協力といった子どもの置かれる環境を通して、間接的に動機づける「間接介入型」と命名した。またこれを得点化したものをそれぞれ「父／母 直接介入得点」「父／母 間接介入得点」とした。

父親・母親それぞれの関わり方の、項目ごとの因子負荷量を比較すると、同じ直接・間接介入型であっても、それぞれの特徴があると解釈できた。父親の直接介入では身体的な、母親の直接介入では心理的な暴力によるアプローチ方法が取られる傾向が捉えられた。また父親の間接介入では熱量の高さからややムキになっている印象を、母親の間接介入では情に訴えるような印象を受けた。

それぞれの介入得点について、①性別、②第一志望校可否、③満足度による差を明らかにするため t 検定を行なった。①男女別では父 直接介入得点で $t = 3.00(df = 131)$, $p < .01$ と有意差が見られた。②第一志望校可否別ではいずれも有意差が見られなかった。③満足度別では母の間接介入得点で $t = 3.03(df = 131)$, $p < .01$ と有意差が見られた。以上のことから、男性の方が父親からの直接介入を受けやすい傾向があること、母親の間接介入得点が高い方が中学受験経験に対する満足度を得やすい傾向があることが明らかになった。

またそれぞれの介入得点の相関係数は Fig.2 に示す通りであった。父母の直接介入型、間接介入型同士にはそれぞれ相関があり、父 間接介入型と母 直接介入型には弱い相関があった。しかし、父 直接介入型と母 間接介入型にはそれがないことがわかった。

(2) 当時の塾や家庭教師の関わり方

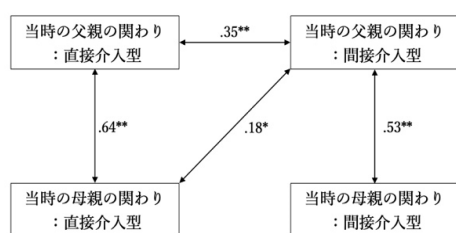
当時の塾や家庭教師（以下、塾と略す）の関わりについての質問全 10 項目を、主因子法・プロマッ

Table 2 Factor analysis of the father's involvement

項目	F1	F2
⑧ 成績の推移や勉強の取り組みに関連して、暴力を振るわれた。	.894	-.18
⑥ 人格や人生を否定されるような発言を受けた。	.842	-.05
⑦ 勉強の意義や大切さを、納得のいくように教えてくれた。	.834	-.04
⑨ 受験をやめるという選択肢を与えてくれた。	.73	.19
④ 褒めてくれるのは模試の結果が上がった時だけだった。	.61	.23
② 勉強や成績について、厳密に管理された。	.03	.85
⑩ 父親と塾や家庭教師が、良好な関係を築いていた。	-.05	.80
③ 自分よりも父親の方が、中学受験に熱を上げていたと思う。	-.02	.73
回転後の負荷量平方和		3.380 2.450
因子間相関 F1		-.35
F2		—

Table 3 Factor analysis of the mother's involvement

項目	F1	F2
⑥ 人格や人生を否定されるような発言を受けた。	.807	.053
④ 褒めてくれるのは模試の結果が上がった時だけだった。	.802	.136
⑦ 勉強の意義や大切さを、納得のいくように教えてくれた。	.793	.030
⑨ 受験をやめるという選択肢を与えてくれた。	.782	-.014
⑧ 成績の推移や勉強の取り組みに関連して、暴力を振るわれた。	.701	-.212
⑤ 成績が上がらなければ、なにかを禁止されることがあった。	.649	.008
⑩ 母親と塾や家庭教師が、良好な関係を築いていた。	.031	.837
① 自主性にまかせ、温かく応援してくれた。	-.220	.788
② 勉強や成績について、厳密に管理された。	.206	.726
回転後の負荷量平方和		3.544 1.928
因子間相関 F1		-.06
F2		—



* $p < .05$, ** $p < .01$

矢印は相関係数を示す。

Fig. 2 Coefficients of correlation between the father's and mother's involvement

クス回転によって因子分析した結果を Table 4 に示す。因子間で相関する 1 項目を削除対象とし、固有値の減衰状況より 2 因子構造と判断した。回転前の 2 因子で全分散を説明する割合は 66.5%であった。

第 1 因子は 4 項目で構成され、内容は父母の関わり方における間接介入型と類似した。生徒の学習環

境を整えることを重視し、生徒自身へは温かい応援を伝え、生徒の成績を押し上げるような印象から「面倒見の良い塾」と命名した。第2因子は5項目で構成され、内容は父母の関わり方における直接介入型と類似した。言葉による暴力が目立つものの、勉強の意義や大切さを伝える項目に高い負荷量が示されることから、それは生徒を動機づける延長に起きることと捉えられた。そのため結果を重視し、生徒の成績を引っ張り上げるような印象を受ける「鍛えてくれる塾」と命名した。またこれらを得点化したものを「面倒見得点」「鍛錬得点」とした。

なお命名はそれぞれ、学習塾を選ぶ側である保護者目線で検討した。その際、各社の広告等に掲載される謳い文句や、業界内でのイメージを参考にした。

「面倒見得点」「鍛錬得点」についてそれぞれ、①性別、②第一志望校可否、③満足度による差を明らかにするため t 検定を行なった。①男女別、②第一志望校可否別ではいずれも有意差は見られなかった。③満足度別では面倒見得点で $t=2.67(df=131), p<.01$ と、満足群で塾の面倒見得点が高い傾向が明らかになった。

Table 4 Factor analysis of the *juku's* involvement

項目	F1	F2
⑥ 保護者と良好な関係を築いていた。	.848	-.063
① 自主性にまかせ、温かく応援してくれた。	.844	-.065
③ 自分よりも先生の方が、中学受験に熱を上げていたと思う。	.829	.017
② 勉強や成績について、厳密に管理された。	.798	.174
⑥ 人格や人生を否定されるような発言を受けた。	.063	.881
⑦ 勉強の意義や大切さを、納得のいくように教えてくれた。	-.294	.785
⑧ 成績の推移や勉強の取り組みに関連して、暴言や暴力を振るわれた。	-.232	.732
④ 褒めてくれるのは模試の結果が上がった時だけだった。	.192	.726
⑤ わからない問題があった時などに、嫌な態度をとられた。	.296	.686
回転後の負荷量平方和	3.026	2.965
因子間相関 F1	-	-.03
F2	-	-

2. 「EM 容認志向」の分析

EM 容認志向に関する質問全5項目について、主因子法による因子分析を行った結果を Table 5 に示す。1 因子構造で全分散を説明する割合は 56.8%であった。中学受験に関連する内容に高い負荷量が示された。この結果に基づき得点化した点数を「EM 容認得点」と名付けた。

性差や中学受験経験差などを明らかにするため、

グループ毎に EM 容認得点の t 検定を行なった。有意差が見られた結果のみを Table 6 に示す。回答者全体では性別 $t=-.32(df=541)$, n.s.、中学受験経験有無別 $t=.40(df=541)$, n.s.と、いずれも有意差は現れなかった。受験群では①性別 $t=.49(df=131)$, n.s.、②第一志望校可否 $t=-.95(df=131)$, n.s.と、性別、第一志望校可否で有意差がないことがわかった。しかし③満足度別では $t=4.11(df=131)$, $p<.001$ と、満足群の得点が有意に高いことが明らかになった。

これらの結果を先行研究と比較すると、スポーツ・ハラスメント容認志向では男性の得点が高くなるという性差が存在したことに對し、EM 容認志向にはそれがないことがわかった。また先行研究では「ポジティブな体験」がその容認志向に影響することが明らかにされていたが、中学受験におけるそれと言えよう「第一志望校合格」のみが EM 容認志向に影響する可能性は低いと考えられた。

なお可否結果の影響について、満足度との関連を探るため、回答者の合格校を志望順位毎に得点化・尺度化した上で t 検定や相関分析を行った。しかしいずれも有意な結果を得ることはできず、現時点では可否結果が満足度に対し直接的な影響を持つことは考え難かった。

つまり中学受験が「ポジティブな体験」であったかどうか、「満足感」を得られた体験であったかどうかは、「合格したからー良かった」「不合格だったか

Table 5 Factor analysis of an EM acceptance-oriented mindset

項目	F1
④ 自分が中学受験をすると決めた以上、厳しい指導も覚悟の上だと思う。	.806
⑤ 自分が中学受験をすると決めた以上、たとえ親から嫌なことを言われても、最後まで続けるべきだと思う。	.777
① 勉強に対するやる気を起こさせるために、少々のごきばは必要だと思う。	.739
② 成績が伸びないのは、本人の努力不足だと思う。	.725
③ 取り組むべき勉強にやる気を出せない人は、何事もうまくいかないと思う。	.721

Table 6 t -test of an EM acceptance-oriented mindset (satisfaction or dissatisfaction with one's experience of the junior high school entrance exam)

	N	M	(SD)	t 値
EM容認得点 満足	99	3.65	(0.93)	4.11***
不満足	34	2.95	(0.61)	

*** $p<.001$

ら「良くなかった」と単純に判断されるものではなく、結果を含めたそれまでの過程全体、すなわち「中学受験期の体験」と、おそらくその進学後の体験も含めて、総合的に判断されるものであると解釈した。よって以降の分析では可否結果を含めず、「周囲の大人の関わり」のみに焦点を当てて行なった。

3. 「中学受験期の体験」と満足度・EM 容認志向の関係

これまでの分析と先行研究から「中学受験期の体験」が中学受験経験に対する満足度やEM容認志向に影響を与えるという仮説を立てることができた。中でも、当時の父親・母親・塾の関わりが、満足度・EM容認志向にどのような影響を与えるかを明らかにした最終結果をFig.3、4に示す。なお事前に父親の直接介入得点に性差が見られたことから、男女別で分析を行った。

まず、中学受験のために通う学習塾の選定が一般的に保護者主導で行われることから、父 直接介入得点、父 間接介入得点、母 直接介入得点、母 間接介入得点の4項目を独立変数、塾 面倒見得点、塾 鍛錬得点の2項目を従属変数とした強制投入法による重回帰分析を行い、「父母の介入タイプと選択する塾の関係」を明らかにした。男性では面倒見の良い塾の説明率が54.0%であり、母親の間接介入型からの有意な正のパスが示された。また鍛えてくれる塾の説明率は51.0%であり、母親の直接介入型からの有意な正のパスが示された。女性では面倒見の良い塾の説明率が35.0%であり、母親の間接介入型からの有意な正のパスが示された。

次に、塾 面倒見得点、塾 鍛錬得点の2項目を独立変数、満足度、EM容認得点の2項目を従属変数とした強制投入法による重回帰分析を行ない、「所属した塾のタイプと満足度・EM容認志向の関係」を明らかにした。男性ではEM容認志向の説明率が19.0%であり、鍛えてくれる塾からの有意な正のパスが示された。女性では満足度説明率が23.0%であり、面倒見の良い塾から有意な正のパスが示され、鍛えてくれる塾から有意な負のパスが示された。

さらに、学習塾の関わりを介さない場合、すなわち「父母の介入タイプと満足度・EM容認志向の関係」を明らかにするため、父 直接介入得点、父 間接介入得点、母 直接介入得点、母 間接介入得点の4項目を独立変数、満足度、EM容認得点の2項目を従属

変数とした強制投入法による重回帰分析を行なった。

有意な結果が得られたのは女性の、母親の間接介入型から満足度に対してのみであった(Fig.5)。満足度説明率は10.0%で、正のパスが示された。しかし標準偏回帰係数は $\beta = .34, p < .05$ と、「面倒見の良い塾から満足度」へのパスに比べると弱いパスであった。

以上の分析から、①男子に対し、母親が直接介入型であると鍛えてくれる塾を選ぶ傾向が高く、間接介入型であると面倒見の良い塾を選ぶ傾向が高い。その後男子は、鍛えてくれる塾での関わりを通してEM容認志向が高くなる傾向がある。②女子に対し、母親が間接介入型であれば面倒見の良い塾を選ぶ傾向が高い。その後女子は、面倒見の良い塾の関わりを通して満足度が上がる一方で、鍛えてくれる塾の関わりを通して満足度が下がる傾向がある。③父母の関わりよりも、学習塾の関わりの方が満足度・EM容認志向に対する影響が強い。の3点が明らかになった。

IV. 考察

1. 父親・母親の介入タイプとEMの構造

「中学受験当時の父・母の関わり」の調査と分析から、まず、少なくとも次の割合で、虐待の定義に当てはまるEMが起きていたことが明らかになった。身体的暴力では父から13.6%、母から12.8%、心理的暴力では父から10.5%、母から14.3%であった。各家庭において、これが中学受験を機に起きた、もしくは増えたことであるかは定かでないが、いずれにしても看過できないことである。

次に、父母の関わり方には「直接介入型」と「間接介入型」の2つのタイプがあることが明らかになった。中学受験は学童期の子どもが取り組む受験であるため、その準備には保護者による手助けなど、何らかの介入が必要不可欠であると推察された。直接介入型の関わりは、父親に身体的な暴力、母親に心理的な暴力による子どもの動機づけが行われる傾向が見られたことから、「スパルタ教育的」と形容できる。また父母のどちらか一方でもこの関わりを持つ場合、家庭内で子どもの心理的安全性を保つことが困難になる可能性があると推察した。さらに男子の方が父親からこの関わりを持たれやすかったことは、男子に対する学歴、ひいては社会的地位獲得への期待の大きさの表れではないかと考えた。

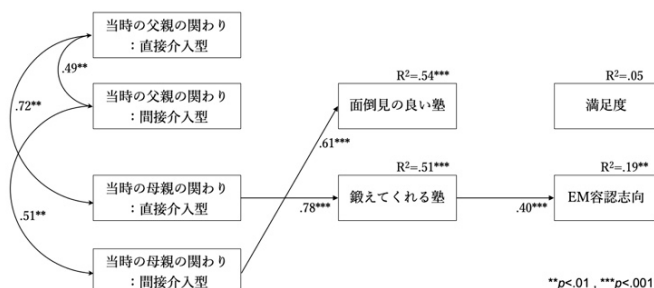


Fig. 3 Model of the influence of experiences during the junior high school entrance exam period on later satisfaction with it and an *EM* acceptance-oriented mindset (men)

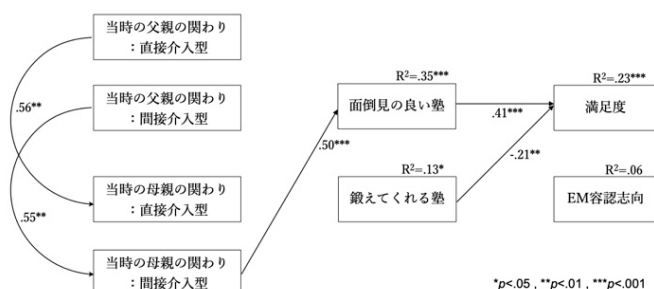


Fig. 4 Model of the influence of experiences during the junior high school entrance exam period on later satisfaction with it and an *EM* acceptance-oriented mindset (women)

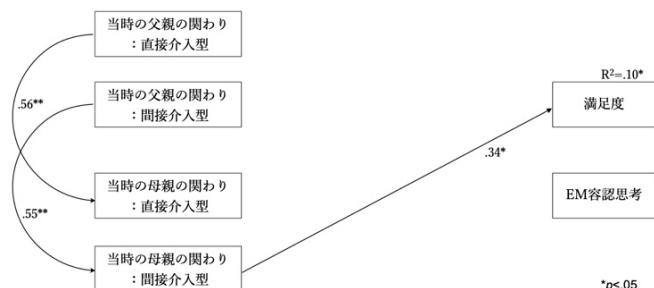


Fig. 5 Model of the influence of experiences during the junior high school entrance exam period on later satisfaction with it and an *EM* acceptance-oriented mindset (women, not through a *juku*)

一方間接介入型の関わりでは、母親がこれによって、中学受験に対する満足感を得やすい傾向が明らかになった。しかし、だからといって「直接介入は悪い、間接介入は良い」と安易に結論づけることはできなかった。なぜなら間接介入型の場合でも、父親は子どもよりも中学受験に熱心である傾向が、母親は情に訴えて動機づけるような傾向があったためである。この関わりは、行き過ぎれば「真綿で首を絞めるような、じわじわと自己決定・意見表明の機会を奪うような、一見そうであるとはわからないよ

うな」*EM* 的物言い・態度に繋がる可能性がある。

以上の検討から、直接介入型の関わりと間接介入型の関わり、そして *EM* は地続きの関係にあって、どちらの関わり方にもそれぞれ利点と欠点^{vi}があり、どちらも「過剰」または「我が子に適さない」場合は、*EM* につながる可能性があるという結論を得た。そのため予防のためには、保護者がどのような介入傾向を示すかに関わらず、ストッパーとして機能したり、意識の変容を促したりする存在が必要であると考えた。

なおそれぞれの介入得点の相関係数からは、父母の介入タイプが一致している場合が多いことが解釈できた。しかし父親の直接介入型と母親の間接介入型にのみ相関関係がなかったことから、父親がこの関わりを見せる場合、母親がそれに対し別の態度を示し難い状況にあるなど、夫婦間に何らかの力関係の差が存在するのではないかと推察する。EMの予防は、このような家族関係も考慮して行われることが望ましいと考える。

2. EM容認志向と中学受験に対する満足感

EM容認志向に関する調査では、まず、一般的な学習場面において、成績向上のためには「しごき(厳しい指導)」よりも「本人の努力」が必要であると認識されやすいことが明らかになった。これは先行研究で扱われたスポーツ・ハラスメント容認志向とは逆の結果であった。スポーツは身体的条件によって「努力しても届かない領域」が一目瞭然であるが、学習は同じ身体であっても、見た目で判断できない脳を用いるために、それがわかりにくいのではないかと。それ故に「(ある程度は)頑張れば、成績が伸びる」と思われやすく、これもEMを助長する一因であると考えた。また中学受験の学習場面では、一般的な学習場面よりも「厳しい指導の必要性」が支持されやすく、特に受験経験のないグループでそれが顕著であった。中学受験期に起きるEMを防ぐためには、「中学受験ってそういう(厳しい)ものだよな」という一般的な認識を変える必要がある。

次に、性別や中学受験経験の有無によってEM容認志向に差がないことが明らかとなった。ただし中学受験を経験し、満足感を得ていた場合、EM容認志向が高まる傾向があった。つまり中学受験経験のある保護者や学習塾講師が、自身のポジティブなイメージから子どもを中学受験に向かわせる場合には、自身の関わりがEMにつながらないよう、意識的に注意する必要がある。またここでは、先行研究との比較検討から逆説的に、中学受験経験に対する満足感が、合否結果のみで判断されるとは考え難いことがわかった。むしろそれは、合否結果を含めたそれまでの過程全体と、その後のさまざまな経験を合わせて、随時判断され続けるものであろう。

最後に、父・母・塾の関わりという「中学受験期の体験」が「満足度」「EM容認志向」に与える影

響の分析結果では、まず、男女ともに選ぶ塾へのパスが母親からのみ示されたことに注目した。はじめに触れたベネッセによる調査において、「子育てや教育について、意見が違うときにどちらの意見を優先させるか」という質問に対し、5256件中69.8%が「どちらかというとも母親」「母親」と回答していた。このことから、当結果に一定の説得力があると判断できた。

次に、満足度・EM容認志向に対する学習塾の影響が、父母の関わりより強かったことに注目した。つまり学習塾が子どもの心理面に与える将来的な影響が明らかになり、これについて学習塾が無責任ではいられないことが示されたといえる。

3. 学習塾が果たせる役割

「中学受験当時の塾や家庭教師の関わり方」の調査では、まず、身体的暴力のみの発生率を明らかにすることができなかったものの、心理的暴力は10.5%~26.3%程度起きていたことがわかった。特に、比較的高頻度で起きていた「わからない問題があったときに、嫌な態度を取られた。」には、講師の無意識の振る舞いも含まれたのではないかと推察する。これが子どもの記憶に深く残ること、心を傷つけかねない行為であることを共通認識として持ち、積極的に防止策を講じることが必要である。

次に、学習塾による生徒への関わり方の分析では、「面倒見の良い塾」、「鍛えてくれる塾」という2つのタイプが明らかになった。これは単純に、優しい系／カッコいい系などと形容した方が公平なイメージを作りやすいかもしれない。いずれにしても、2つのタイプによる合否差が見られなかったことは、興味深い結果であった。

学習塾の関わりによる満足度・EM容認志向への影響の分析からは、男子は「鍛えてくれる塾」の関わりを通してEM容認志向が高まること、女子は「面倒見の良い塾」の関わりを通して満足度が上がる、「鍛えてくれる塾」での関わりを通して満足度が下がることが明らかになった。前節で触れた通り、保護者の関わりよりも強い影響力を持つことを考慮すると、特に「鍛えてくれる」傾向の高い学習塾は、男子のEM容認志向を助長し、女子の中学受験に対する満足度を下げるといふ、保護者の関わり以上に強い、望ましくない影響を与えるという結論を得た。

以上のことや前節までに得られた結論を EM 予防の観点から見ると、学習塾は子どもと保護者に対し、それぞれ以下の役割を担う必要があると考える。

子どもに対しては、結果に囚われず、中学受験経験による総合的な満足感を与える役割である。そのためまずは自身の影響力の強さを自覚し、「鍛えてくれる塾」様の関わりについては、(そのように関わったところでどうやら合否に大きな差は出ないようであるから) その関わりが真に適切であるかどうかを慎重に検討することが求められる。また総合的な満足感とは、その後の人生にその進路が生きようが生きまいが、振り返ってみて「中学受験を経験して良かった」と納得できるような体験から得られるのではないかと。つまり、合否に囚われるあまり「あんなに厳しく鍛えられ、頑張ったのに無駄だった」という感情の芽を残すより、「あの時期、頑張ることができた」というような、中学受験の過程におけるポジティブな記憶や感情を与えることを重視した中学受験指導を目指す必要があると考える。これによって、「中学受験は厳しいもの」というイメージを払拭することにも繋がるであろう。しかし同時に、満足度が高いほど EM 容認志向が高くなる傾向もあるため、未来の大人に対しては EM「否認志向」を促す必要があることを忘れてはならない。

保護者に対しては、保護者の介入タイプと EM の構造や、背後にある家族関係を考慮しながら、EM「否認志向」を促し意識を変える役割や、EM 傾向に対するストッパーの役割を担う必要があると考える。これは今井ら (2020) の研究で明らかになった「親子関係調整機能」や「保護者受容機能」に関連する機能であると考えられる。そのためすでにこれを担い、実践する中学受験指導塾も存在するのではないかと。今後はこれをどのように実践し、汎用的に活用できるかという観点からの研究が求められる。

4. おわりに

EM 研究は黎明期にあり、これまでの中学受験研究でも親・子・学習塾を含めた三者関係における研究はなく、暗中模索しながらの取り組みとなった。また一口に中学受験といっても、それがどのような経緯を辿るかを分ける選択肢が多く、個別事例性が高まりやすいことを改めて認識した。そのため個人による量的調査には限界があり、いくつかの課題が残った。しかし本研究は、今後の EM 研究、および

中学受験研究の一助となったのではないかと考える。

V. 参考文献

- 1) 首都圏模試センター：2024 年私立・国立中学受験者数は 52,400 名と微減ながら受験率は過去最高の 18.12%に！《首都圏》。 <https://www.syutoken-mosi.co.jp/blog/entry/entry004298.php> (情報取得 2024 年 11 月 1 日)
- 2) コアネット教育総合研究所：【入試概況レポート】2024 年中学入試総括レポート。 https://core-net.net/t/2024_exam_report/ (情報取得 2024 年 11 月 1 日)
- 3) 大西将史・廣澤愛子 編：エデュケーショナル・マルトリートメントの理解と対応 教師と支援者が「教育虐待」を防ぐためにできること。中央法規出版 (2024)
- 4) 武田信子：やりすぎ教育 商品化する子どもたち。ポプラ社。56-57 (2021)
- 5) ベネッセ教育総合研究所：首都圏の保護者の中学受験(受検)に関する意識と行動。 <https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3275> (情報取得 2023 年 10 月 12 日)
- 6) 佐藤沙穂：学校・家庭・地域の受け皿としての塾。三重大学大学院人文科学研究科修士論文 (2010)
- 7) 今井さやか・大川一郎：塾職員が行う学習以外の相談支援の検討－満足・疲弊に関する個人差に着目して－。筑波大学心理学研。91。2。83-93 (2020)
- 8) 澤田英三：子どもにとって「ナナメの関係」はどのような役割を果たしているのか 一生徒指導・進路指導において児童生徒の多面性を受容する存在として－。安田女子大学大学院紀要。24。29-43 (2019)
- 9) 藤後悦子・井梅由美子・大橋恵：スポーツにおけるポジティブ体験・ネガティブ体験とスポーツ・ハラスメント容認傾向。東京未来大学研究紀要。8。93-103 (2015)

VI. 付記

本稿は、筆者が 2023 年度に日本女子大学へ提出した卒業論文を、加筆修正したものである。

<注>

- i 本稿では「中学受験」に統一して表記するが、公立中高一貫校・国立大学附属中高一貫校では

入学選抜方法として「適性検査」と「作文」が用いられる。そのため当調査では国公立のみを志望する層を想定し、「受検」が並記される。

- ii 大手塾か個人塾か、集団指導塾か個別指導塾かなど。それによって生徒数や講師との心理・物理・社会的距離が異なることが想定される。
- iii 主に中学・高校・大学受験対策に特化し、対象学年である小学4～6年・中学3年・高校3年生を対象に指導する学習塾を指す。集団指導形式を取ることが多い。
- iv 指導内容を受験対策に限定せず、全学年を対象に学校の補修や先取り指導を実施する学習塾を指す。個別指導形式を取ることが多い。
- v 1977年に精神療法家の笠原嘉によって論じられ

た、子どもの人間関係を捉えるための概念である。笠原はその特徴を「青年に対して『無責任でありうる程度に応じて、それだけ青年の言葉に素直に耳をかし考える自由度を増す』関係」⁸⁾とした。

- vi 例えば直接介入型の関わりの利点は、即効性が高いと予想できる点ではないか。一方間接介入型の関わりは最終的にそれが本人の動機づけに繋がるかどうか分かりづらいのではないか。中学受験という期日のある取り組みの場合、これは保護者にとって大きな欠点に見えるであろう。

(指導教員：日本女子大学名誉教授 岡本吉生)

参考資料1

カテゴリ	父親・母親の中学受験期の関わりについての質問内容
管理方法の傾向	① 自主性にまかせ、温かく応援してくれた。
	② 勉強や成績について、厳密に管理された。
	③ 自分よりも父親/母親の方が、中学受験に熱を上げていたと思う。
心のケアの方法	④ 褒めてくれるのは模試の結果が上がった時だけだった。
	⑦ 勉強の意義や大切さを、納得のいくように教えてくれた。
	⑨ 受験をやめるという選択肢を与えてくれた。
懲罰の有無	⑤ 成績が上がらなければ、なにかを禁止されることがあった。
身体的暴力の有無	⑧ 成績の推移や勉強の取り組みに関連して、暴力を振るわれた。
心理的暴力の有無	⑥ 人格や人生を否定されるような発言を受けた。
塾・家庭教師との関係	⑩ 父親/母親と塾や家庭教師が、良好な関係を築いていた。

参考資料2

カテゴリ	学習塾の中学受験期の関わりについての質問内容
管理方法の傾向	① 自主性にまかせ、温かく応援してくれた。
	② 勉強や成績について、厳密に管理された。
	③ 自分よりも先生の方が、中学受験に熱を上げていたと思う。
心のケアの方法	④ 褒めてくれるのは模試の結果が上がった時だけだった。
	⑦ 勉強の意義や大切さを、納得のいくように教えてくれた。
	⑨ 勉強以外の話をしたり、聞いたりしてくれた。
心理的暴力の有無 (身体的暴力の有無)	⑤ わからない問題があった時などに、嫌な態度をとられた。
	⑥ 人格や人生を否定されるような発言を受けた。
	⑧ 成績の推移や勉強の取り組みに関連して、暴言や暴力を振るわれた。
保護者との関係	⑩ 保護者と良好な関係を築いていた。